

## Ⅶ． 職 業

### 1. 仕事のしきたり観

ここでは、仕事のしきたり観に性、年齢、学歴、住居形態、職業、西陣関係といった対象者の属性がどのようにかかわっているかをみる。

西陣織は、伝統という歴史の流れと、地域の社会的分業という拡がりによって存在している。文化としての仕事のしきたりやきまりは、こういった西陣織の性格にかかわる側面と、他方、京都という地域性にかかわる側面によって形成される。古くかつ地域的に限定された産業ほど、仕事のしきたりやきまりが強いといえるかもしれないし、またあまり強いしきたりやきまりは、その仕事への新規加入を妨げる要因になるかもしれない。

まず、問のワーディングについて考えておきたい。「西陣には、仕事に関係した昔からのしきたりや、きまりなどが根強く残っていると感じることはありませんか」のなかの、残っている事実（観察者によって、その事実の有無、あり方は様々である）とその事実をどのように感じるかは、実態と意識という異なった次元に属する。しかし、回答者は、普通、形の有無を問わずなんらかのきまりやしきたりの一部あるいはそれから構成される全体を念頭に浮べて、それに対する自分の感じ方を答える。回答者によっては、昔からのしきたりやきまりそのものが今はないと認識するし、また今のしきたりやきまりが昔からのものかどうか分からない。しかし、それにしても現実の生活者は、かれの地域社会や職業のなかで、文化としてのなんらかのしきたりやきまりを受容しつつ、またそれらに拘束されつつ日々暮らしている。

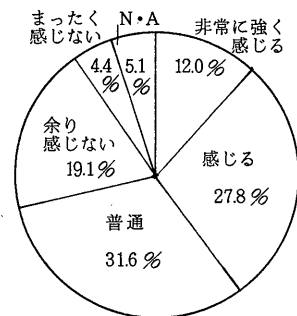
問いは意識を問うているものではあるが、その意識は実態の反映でもある。したがって、ここでは実態と意識とをことさら区別することはせず考えていきたい。

きまりやしきたりに対する感じ方に影響する要因は個人的要因、社会的要因などさまざまであろうが、ここでは主として住民個人にかかわる要因を中心に分析する。具体的には、性別、学歴、家族構成、住宅の種類、居住年数、職業、収入である。

#### (1) 仕事のしきたりやきまり

まず、人びとがどの程度「仕事に関係した昔からのしきたりやきまりが根強く残っていると感じているか」を概括的にみておこう。

図Ⅶ-1 仕事のしきたりやきまり観



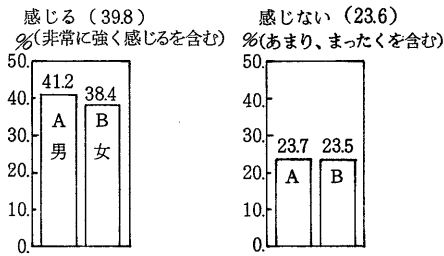
図Ⅶ-1のように、感じ方の程度の比率は、「普通」が最も高く約32%、そして「感じる」約28%、「あまり感じない」約19%、「非常に強く感じる」12%、「まったく感じない」約4%の順で低くなっている。普通を別にすれば、感じるとする者約40%、反対に感じないとする者約24%であり、感じる者は感じない者の約1.7倍になっている。また、非常に強く感じる者はまったく感じない者の約3倍になっている。この数字を早速説明したいけれども、こうした仕事上のしきたりやきまりに対する感じ方に、伝統産業としての西陣あるいは地域社会としての西陣にかかわる特長があるか否かについて、他

地域、他産業との比較ができるまで今少し結論を留保したい。

ただ、一般的にいえることは、伝統産業は現在に至るなかで余程根本的な変革がないかぎり、その一つの文化であるしきたりやきまりは固定化、パタン化してきているといえよう。その意味では、西陣は独自の労働慣行、商慣行をもっているといえる。もちろん、歴史という時代的な要因だけでなく、社会的分業システムという経済的な要因によっても、仕事のしきたりやきまりが規定されていよう。

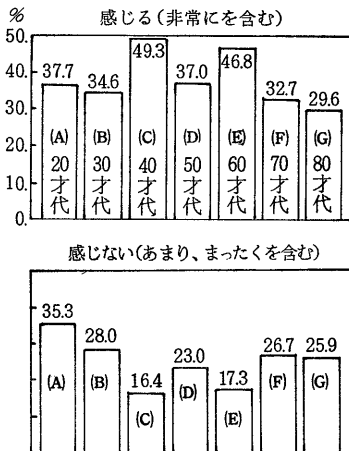
それでは、つぎにしきたり観を、性別、年齢別、学歴別、住居形態別、職業別、西陣関係の有無別にそれぞれみておこう。

図Ⅶ-2 性別しきたり観



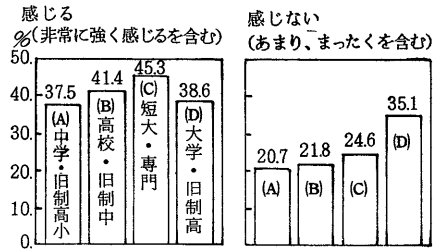
性別の感じ方の相違は、図Ⅶ-2のようにほとんどないが、「感じる」と答えた者は、男が相対的に高い。これは、問の「仕事に関係した昔からのしきたりや、きまり……」という内容にある程度かかわっているように、それにしても、男女間の差は少ない。

図Ⅶ-3 年齢別しきたり観



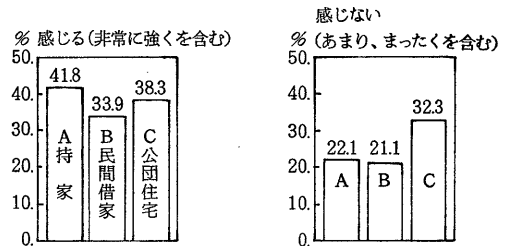
年齢別にみると、図Ⅶ-3のように、40歳代および60歳代が感じるで上位1,2位を占めて、感じないで最下位1,2位を占めている。この年齢層は感じるという一方のみに片寄っているが、20歳代は感じると感じないがほぼ同率であり、両極に分離している。70歳以上の高齢者の感じないとする比率が高いのはかれらの職業生活からの離脱に帰因している。それにしても、50歳代が40,60歳代と連続性がないのは不思議である。

図Ⅶ-4 学歴別しきたり観



学歴別にみると、図Ⅶ-4のように、「感じる」は短大・専門学校卒に高く、「感じない」は大学・旧制高校卒に高い。普通は中学・旧制高小卒が最も高い。

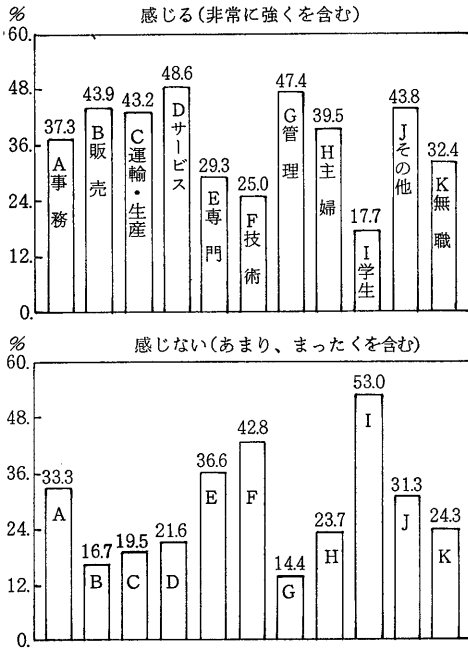
図Ⅶ-5 住居形態別しきたり観



住居形態別にみると、図Ⅶ-5のように、感じる持家に高く、民間借家に低い。また、感じないとする者に両者の割合の差はない。公団は、感じないとする者が他より圧倒的に高いが、感じるとする者も高い。

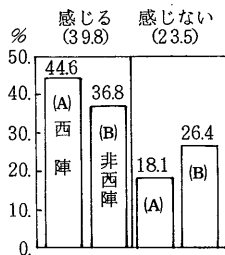
職業別にみると、図Ⅶ-6のように、感じるのは、サービス職の49%、管理職の47%、販売の44%の割合が高い。逆に、感じないのは、技術・技能職の43%、専門職の37%、事務職の33%が高い。すなわち、仕事のしきたりやきまりを感じるのは、直接、人や人間関係にかかわる職業で高く、反対に感じないのは、ものやものの利用にかかわる職業で高い。

図Ⅶ-6 職業別仕事のしきたり観



図Ⅶ-7

西陣関係の有無別  
仕事のしきたり観



西陣関係の有無別にみると、図Ⅶ-7のように、西陣関係者は感じるが45%であり、感じないは18%に過ぎない。非西陣関係者の感じるが37%、感じないが26%と比較するとき、西陣の伝統に規定された性格がみられるであろう。

以上、要約するとつぎのようである。

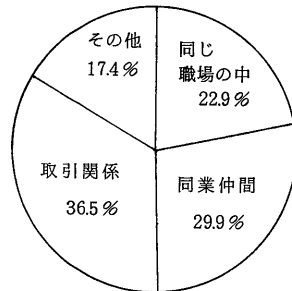
まず、性別では男のほうがしきたりやきまりを感じる割合が高い。仕事に関係したしきたりやきまりの感じ方を問うているので、男の9割の有職率、女の6割の有職率を反映した回答になっている。年齢別では40代と60代に感じる者の割合が高くなっている。40代では管理職の多さ、60代の生産工程従事者の多さに帰せられるであろう。ただ、生産工程従事者がそのまま感じる割合が高いというわけではなく、60代という年齢に限定された仕事内容に規定されている。20代両極型、50代は感じるが低くなっている。

る。学歴別では、大学卒は感じないが高い。住宅形態別では、持家は感じるが高く、公団は感じないが高い。職業別では、サービス、管理職は感じるが高く、技能・技術職は感じないが高い。西陣関係別では、西陣関係は感じるが高く、非西陣は感じないとする者の割合が高い。

## (2) 仕事のしきたりやきまりを感じる状況

まず、仕事に関係した者からのしきたりやきまりをどのようなばあいに感じるかを概括的にみておこう。

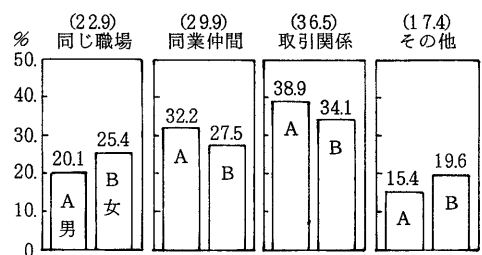
図Ⅶ-8 仕事のしきたりを感じる状況



図Ⅶ-8のように、感じる状況は「取引関係」が最も高く37%、「同業仲間」30%、「同じ職場の中」23%、「その他」17%の順になっている。

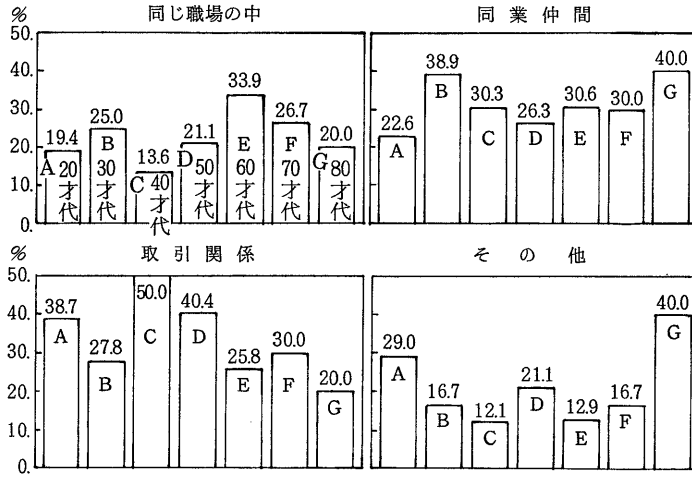
性別にみると、図Ⅶ-9のように、男は同業仲間や取引関係で、女は同じ職場の中となっているが、これは男女による職業構成の違いによる。

図Ⅶ-9 性別のしきたりを感じる状況



年齢別にみると、図Ⅶ-10のように、20代は取引関係で、30代は同業仲間、40代と50代は取引関係で、60代と70代は同じ職場の中となっている。このことは、それぞれの年齢階級に対応した職業、職種、従業上の地位などに帰因するものであろう。

図Ⅶ-10 年齢別しきたりを感じる状況



学歴別にみれば、図Ⅶ-11のように、低学歴が同じ職場や同業仲間で、高学歴が取引関係となっている。

住宅形態別では、図Ⅶ-12のように、持家が取引関係や同業仲間で、民間借家は同じ職場の中や取引関係で、公団住宅は同じ職場の中が極端に低く、同業仲間やその他でそれぞれ高い割合を占めている。

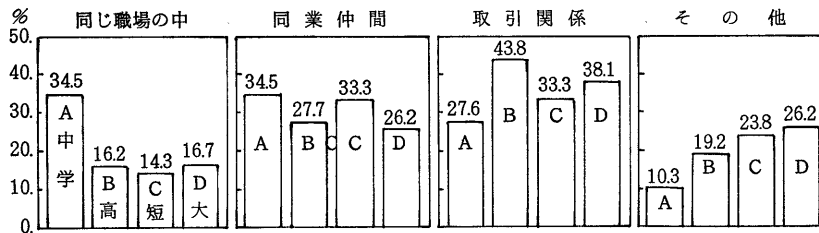
職業別では、図Ⅶ-13のように、事務職と運輸・生産工程に同じ職場の中の割合が高い。これは事務、生産工程という空間的に規定された場所での就労の形態からきている。サービス職、技術・技能職、管理職に同業仲間の割合が

高い。運輸・生産工程、技術・技能職、管理職に取引関係の割合が高い。専門職にその他の割合が高い。要するに、職業および職業内の地位と役割によって規定される職業活動の空間的範囲、あるいはプロフェッション性といった職業活動の内容などが、しきたりを感じる状況に影響を及ぼしている。

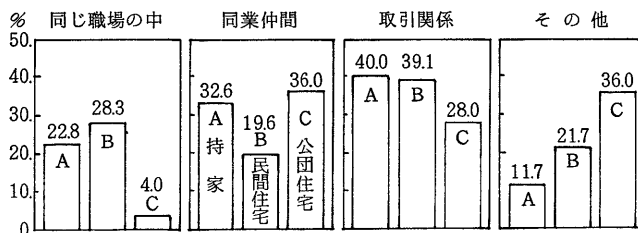
西陣関係の有無別では、図Ⅶ-14のように、西陣関係者は取引関係が極めて高い割合ででている。これは、西陣の正に西陣たる所以である社会的分業システムから帰因するものである。

(星 明)

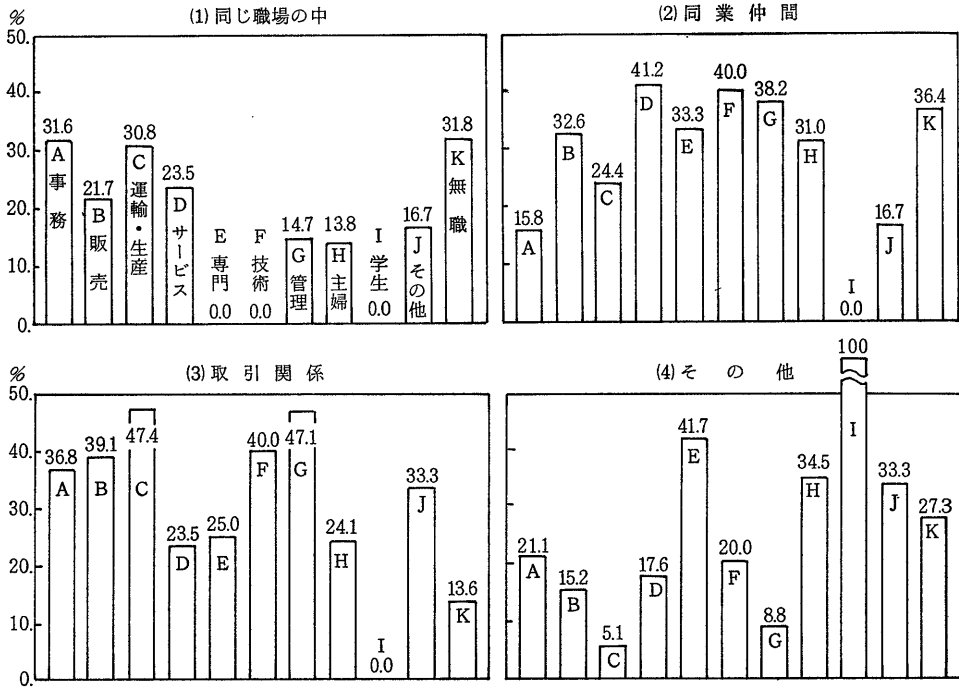
図Ⅶ-11 学歴別しきたりを感じる状況



図Ⅶ-12 住宅形態別しきたりを感じる状況



図Ⅶ-13 職業別しきたりを感じる状況



図Ⅶ-14 西陣関係の有無別しきたりを感じる状況

